



近代中国における商業印刷物「月份牌」に関する基礎的研究 ―一日刊新聞『申報』（1872-1949年）を基本資料として

于, 晓妮

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2013-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5743

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005743>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏 名 于 曉妮
専 攻 人間表現
指導教官氏名 中山 修一
論文題目 (外国語の場合、その和訳を併記すること。)

近代中国における商業印刷物「月份牌」に関する基礎的研究
——日刊新聞『申報』(1872-1949年)を基本資料として

論文要旨

1. 本研究の目的と方法

本研究は、中国清朝末期から中華人民共和国の建国までのあいだにあって上海に出現した商業印刷物「月份牌」の変容を対象として、考察するものである。初期の月份牌は、清朝末期、外国が中国に進出ときに、カレンダーとして出現し、その後、中国社会の近代化とともに発展してきた商業の需要により、次第に商業広告へと変容し、そして、中華人民共和国の建国により、その役割は「改造」され、最終的にその姿を消すことになる。本論文においては、次の6つの視点から月份牌の変容過程を跡づけてみたいと思う。

- [1] 月份牌の起源とその出現を促した社会的要因を特定すること。
- [2] 月份牌の出現から衰退までの全過程を一貫した視点から論じること。
- [3] 論じるにあたっては、単に思弁的な美的側面からの記述に終始することなく、月份牌の機能や役割に關しての社会的文化的観点から実証的分析を行うこと。
- [4] さらに加えれば、企業(スポンサー)、絵師、製作技法、印刷技術、さらには利用者にかかわる月份牌の生産と消費の構造に着目し、あくまでも一次資料に基づき、他方、資料の少数性ゆえにたとえ部分的になろうとも、その歴史的事態を明らかにすること。
- [5] 一方、20年代及び30年代における、高度の印刷技術を駆使して展開される月份牌が「商業広告ポスター」として完成の方向へ向かう過程において、本来の「暦」として機能が縮小ないしは排除されて、その部分が独立した形式になる過程にも関心を寄せ、そうした「ポスター」と「暦」の分裂という点についても資料に基づき例証すること。
- [6] 中華人民共和国の建国以降の政府指導による月份牌の「改造」に關しての実態の一側面を明らかにすること。

こうした全体的視点に立ち、基礎的な歴史的事実を積み重ね、その発展過程を社会的文化的文脈から明らかにしよう試みは、そのこと自体に学術的な価値があるだけでなく、結果として、今までの先行研究において間違って記述されている部分や、あるいはまた、曖昧に記述されている箇所を修正するという副次的な価値をもつことになるであろう。

それではこうした目的を達成するためには、どのような方法を用いばいいのであろうか。まず確認しなければならないのは、研究対象である月份牌の残存の状態である。日本において月份牌をコレクションする美術館は、現在のところ、福岡アジア美術館のみであるが、この美術館が所蔵するものは、とくに1920年代及び30年代の月份牌である。一方、本国中国にあっては、一部の個人コレクターによる収集はあるものの、公的な美術館や博物館、あるいは研究所での収蔵状況の詳細は、いまのところ不明である。

こうした実態について、一般的に考えられるのは、「カレンダー」としての月份牌であろうと、「ポスター」として月份牌であろうと、それが消費財であったがために、使用後は、これまでほとんどが廃棄される運命にあったのではないかということである。とりわけ人の注目を集めやすい「美女図」としての月份牌はまだしも、初期の「中西合曆(中国曆と西洋曆を併載したカレンダー)」としての月份牌については、実際にはほとんど残存していないのである。また同時に、文化大革命の時代においては、資本主義文化の象徴として月份牌はみなされたことによって、その多くが破棄された可能性がある。そのようなわけで、いずれにしても、本研究にあっては、編年のかつ系統的に収集され保管されている、まとまった量の実作の月份牌を研究の対象とすることは、現実的にできないのである。つまり、残存する作品をもって、月份牌の全体史を描くことは、現状では不可能ということになる。そこで、その代替方法として、月份牌が誕生したのはいかと思われる時期から衰退する時期までにあつて、月份牌に最も密接に関係していたであろうと考えられる文書資料(信頼するにふさわしい一次資料)としての日刊新聞『申報』に着目してみたいと思う。

そのようなわけで、本研究では、主に1872年から1949年まで上海で刊行された日刊新聞である『申報』に掲載された広告と記事、雑誌『美術』と『美術研究』の記事と論文などの文字資料を基本資料とし、さらにそのうえに、同時代の出版物である『申報画刊』、及び月份牌コレクターの趙青岩のコレクションとアジア美術館の所蔵品などの月份牌に関する図版資料を加えながら、月份牌消長の全体像を描き出したいと思う。

2. 本論文の構成

本論文は、以下のような各章によって構成されている。

序章

- 1. 本研究の背景
- 2. 先行研究の検討
- 3. 「月份牌」という名称の意味の複雑性について
- 4. 本研究の目的と方法
- 5. 基本資料として用いる日刊新聞『申報』等について
- 6. 本研究の構成と概要

第1章 月份牌の出現をめぐる——1875-76年

第1節 月份牌の起源に関する諸説と新発見

第2節 合曆としての月份牌の原型

第3節 合暦出現の背景

第4節 最初期の月份牌の印刷技法

第2章 おまけとしての月份牌の利用——1884年以降

第1節 合暦需要の拡大

第2節 「月份牌」という呼称の用例

第3節 呂宋票のおまけとしての月份牌

第4節 『申報』のおまけとしての月份牌

第5節 『点石斎画報』の刊行と絵師たち

第6節 月份牌の価格と印刷地

第3章 多色石版印刷の移入と美しい月份牌の登場——1905年以降

第1節 商務印書館による日本の印刷技術の移植

第2節 印刷物供給の拡大と月份牌絵師の必要性

第3節 企業間の贈答品への月份牌の変容

第4節 一般消費者の視覚的欲望の対象としての月份牌

第4章 広告ポスターとしての月份牌の発展へ向けて——1915年以降

第1節 オフセット印刷の導入と広告ポスターの芽生え

第2節 印刷技術を学ぶ中国人留学生の存在

第3節 専門家としての月份牌絵師たちの活躍

第4節 「新女性」の登場とその背景

第5節 『申報』及び『申報画刊』に出現した美女月份牌とその製作技法

第5章 商業的月份牌の衰退と政治的「改造」——1959年まで

第1節 月份牌の商業的側面への批判

第2節 月份牌のカレンダーとポスターへの分裂

第3節 「商業広告」の進化と月份牌の役割の衰退

第4節 「年画」から「新年画」への月份牌の「改造」

終章——結論と考察

3. 本論文の内容

それでは以下に、本論文の内容として、各章ごとにまとめておきたい。

これまで、月份牌の起源について、年画研究者の王樹村は、自らが所有する月份牌の記載内容から判断して1896年を、都市文化研究者の張偉は、日刊新聞『申報』の広告における記載内容を証拠として1884年を、そして広告研究者の鄭立君は、同じく日刊新聞『申報』の広告における記載内容を

証拠として1876年を主張していた。先行研究における混乱の一部は、この月份牌の起源を巡ってであった。しかし、少なくとも『申報』に掲載された広告に基づく限り、月份牌という文字は1875年に初出してことがわり、第1章の「月份牌の出現をめぐって——1875-76年」では、そのことについて論じている。さらにこの章においては、初期月份牌が、西洋海運会社が運航する船の出入港スケジュールにかかわって中国人利用者に便宜をはかるために、西洋暦を中国暦に転換する仲介物として使われていたことも明らかにする。

第2章の「おまけとしての月份牌の利用——1884年以降」においては、合暦（中国暦と西洋暦）の需要の拡大により、月份牌は、呂宋票や『申報』などの商品の「おまけ」として利用されるようになったことを明らかにしている。さらにこの時期、呂宋票の「偽物防止」の観点から、月份牌に図案が投入されるが、使用者に与える情報の主たる部分は、商業広告的要素としての「図案」でなく、あくまでも、両暦の変換機能をもった「合暦」であると考えることができる。一方、この時期に発刊された『点石斎画報』と『申報』の記事を分析すると、月份牌の絵師の第一人者と認められた周慕橋と彼が絵師として一時期務めた『点石斎画報』が、実は、暦中心のカレンダーとしての月份牌からポスターとしての月份牌への変容するにあたって大きな力となって作用したのではないかと推論している。

第3章においては、月份牌の印刷技術について詳述されている。1905年に、商務印書館が日本の金港堂との合併によって、多色石版印刷技術を移入し、精巧に絵を印刷することを可能とした。さらに、この時期、専門的な絵師を起用することにより、月份牌は、暦を中心とした実用性重視の表現から、図案の部分を強調する装飾性重視の構成へとその役割が変貌し始めた。本章では、このような役割の転換により、月份牌が企業間の贈答品として利用されるようになったことを明らかにする。さらに続けて本章において、黄楚九のような企業家たちにとって、この時期広告に対する関心が日に日に高まり、月份牌にとって新たな発展の道が用意されることになり、大衆にとって、より一層身近な存在となって、さまざま階層の人の目に触れる存在へと変わっていった過程が記述されている。

続く第4章においては、1915年以降、アメリカからオフセット印刷機が中国に移入され、より精巧でかつ低コストの大量生産のための技術が進歩し、月份牌の発展も大きく加速されていったことを明らかにしている。一方、手軽で有効な広告になるにつれて、もっと大衆の強い注目を引くうえから、月份牌の表現も内容も、大衆の関心を引き付けるモチーフを必要とするようになっていった。まさしく背景にあって、社会に進出するようになったばかりの新しい女性たちに視線が向けられたのであった。この章においては、月份牌に描かれたモチーフが伝統的なテーマから美人絵へと変容した社会的背景を探究することにより、女性の社会進出の実態についての一端を明らかにし、さらに、この時代に続出した月份牌の著名絵師とその製作実態を分析することになる。

この時期はまさしく、高度の印刷技術を駆使して展開される月份牌が「商業広告ポスター」として完成の方向へ向かう時期に相当する。専門的な商業運営システムのもとで製作され、一産業として成り立とうとしていた。実にこの時期は、月份牌史にとって最も華やかな活動期ということがいえるであろう。ほとんどの先行研究が、この時期に集中するのも、そのような理由からなのである。

しかし、このような完全に商業的基盤に基づいた製作サイクルには、光と影が同時に存在してい

た。第5章においては、社会各界から商業的表現形式としての月份牌に投げかけられた道徳的観点からの批判を例証したうえで、商業的広告ポスターとしての月份牌と暦としての月份牌とが分裂していく実態を明らかにし、続けて、1930年代半ばからの、新しい広告表現形式の出現と抗日戦争のはじまりによって、月份牌のさらなる発展は制限され、こうして月份牌が衰退への道をたどる過程を明示している。この章の最終節では、1949年の中華人民共和国の建国から間もなくして、商業ポスターとしての月份牌にメスが入れられ、社会主義国家理念と政治宣伝のために用いられる宣伝媒体としての「新年画」へと月份牌は新政府の指導のもとに「改造」されていく歴史的流れが描写されている。この時期の月份牌の「改造」に関する史的記述に際しては、既に基本資料としての『申報』は廃刊となっているため、主に『美術』と『美術研究』のふたつの雑誌に掲載された論文を引用するかたちをとりながら、再現することになる。こうして、ここに至って月份牌は本来の役割（カレンダーと商業ポスター）を終え、それから半世紀がたった今日にあつては、歴史上の幻影ないしは遺産として、わずかながらその姿を見せるに止まっているのである。

論文審査の結果の要旨

氏 名	于 晓妮		
論文題目	近代中国における商業印刷物「月份牌」に関する基礎的研究 ——日刊新聞『申報』（1872—1949年）を基本資料として		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	中山 修一
	副 査	教授	小高 直樹
	副 査	准教授	田畑 曉生
	副 査	教授	浅野 慎一
	副 査	教授	吉田 典子（国際文化学研究科）
要 旨			
本研究は、中国清朝末期から中華人民共和国の建国までのあいだにあって上海に出現した商業印刷物「月份牌」の変容を対象として、考察するものである。初期の月份牌は、清朝末期、諸外国が中国に進出したときに、カレンダーとして出現し、その後、中国社会の近代化とともに発展してきた商業の需要により、次第に商業広告へと変容し、そして、中華人民共和国の建国により、その役割は「改造」され、最終的にその姿を消すことになる。本論文では、そうした月份牌の変容過程の全貌が、日刊新聞『申報』（1872—1949年）の記事と広告を基本資料として跡づけられている。本論文の目次構成は、以下のとおりである。 序章 第1章 月份牌の出現をめぐって——1875-76年 第2章 おまけとしての月份牌の利用——1884年以降 第3章 多色石版印刷の移入と美しい月份牌の登場——1905年以降 第4章 広告ポスターとしての月份牌の発展へ向けて——1915年以降 第5章 商業的月份牌の衰退と政治的「改造」——1959年まで 終章——結論と考察 第1章では、月份牌の起源について論じ、西洋の海運会社の運航スケジュールにかかわって西洋暦と中国暦の合暦として出現したことが明らかにされている。			

第2章では、こうした合暦の受容の広がりに伴い、月份牌が、呂宋票や『申報』などの「おまけ」として利用されるようになったことが跡づけられている。

第3章では、金港堂との合併によって商務印書館が日本の多色石版印刷を移入し、精巧で美しい絵の印刷が可能になった経緯や、そうした変化を背景に、専門家としての絵師が出現し、月份牌も、単に実用的な暦に止まらず装飾的な図案へと進化していった過程が述べられている。

第4章では、アメリカからオフセット印刷が中国に輸入されたことにより、低コストの大量生産のための印刷技術が発展し、月份牌の表現や内容も大衆化するとともに、当時社会的に関心が集まっていた「新しい女性たち」が積極的にモチーフとして登場するようになり、月份牌が「商業広告ポスター」としての役割を担いはじめたことが例証されている。

第5章では、抗日戦争のはじまりによって月份牌の発展は制限されるようになり、さらには、中華人民共和国の建国後は、政府の指導のもと政治的宣伝を行なう媒体として月份牌は「改造」され、建国以前に見られた月份牌の表現と機能は姿を消すことになっていく過程が描写されている。

こうして終章において、月份牌は、明らかに中国の近代化（ないしは西洋化）の一部を体现するものであり、今日使用されている合暦の起源を提供するものであり、さらには今日の商業デザインの原型をなすものであることが結論づけられている。

この博士論文の執筆の過程にあって、関連する以下の4編の査読付論文が著者によって公刊されており、これは博士論文としての審査要件を満たすものとして判断することができる。

（1）于晓妮「月份牌の出現と初期の社会的役割——『申報』の記事と広告を基本資料として」『表現文化研究』第9巻第1号、神戸大学表現文化研究会、2009年11月、1—20頁。

（2）于晓妮「20世紀初頭の中国における印刷技術の近代化とその月份牌への影響——『申報』の記事と広告を基本資料として」、『表現文化研究』第10巻第1号、神戸大学表現文化研究会、2010年11月、1—17頁。

（3）于晓妮「月份牌起源探究——以『申報』登載之広告和新聞記事為資料」、袁熙陽主編『設計学論壇』第1巻、南京大学出版社、2010年10月、42—66頁。

（4）于晓妮「簡析日本明治開化時期的“錦繪新聞”——与『點石齋画報』相对照」、楊曉陽主編『中国国家美術』2010年第1期（創刊号）、『中国国家美術』出版社、2010年5月、209—213頁。（本論文は、中国留日同学会主催第13回在日中国人留学成果報告会優秀論文として神戸市長賞を受賞）

月份牌については、これまで雑誌記事や展覧会カタログなどにおいて断片的に言及されてきているものの、本格的な学術研究は皆無に等しい状況にあった。本研究は、月份牌の出現と消滅までの期間とほぼ同じ時期に、同じ地域である上海において発刊された日刊新聞『申報』の月份牌に関するすべての記事と広告を資料として記述された、月份牌の基礎的全史といえるものである。こうした試みは、これまでの先行研究においては認めることができなかった試みであり、このこと自体に学術的な価値があるだけでなく、結果として、これまでの言説やあいまいな記述を修正するという副次的な価値をもつことになった。そうした所見により、審査委員は、全員一致して、学位申請者の于晓妮は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。